

裏磐梯地域で確認された外来植物

横山 潤・長田悠実・遠藤沙耶・工藤幸太・佐藤宏美

(山形大学理学部生物学科)

1. はじめに

外来生物は、人為的に自然分布域外へ移入された生物を指し、移入先の生態系およびそこに生息する生物種の存続に大きな影響を与えることがあることから、大きな問題となっている種も少なくない（日本生態学会 2002）。植物は種子の状態で比較的容易に持ち込まれることから、外来種の種数も格段に多く、日本国内でこれまで 1500 種以上の外来植物が記録されており、しかもその種数は現在も増加し続けている（日本生態学会 2002；植村他 2010）。刻一刻と変わる外来植物の種相や分布状況の継続的な記録とその解析は、外来種の防除の観点からも重要であるが、侵入した種がどのように分布を拡大していくのかといった、生物学的な問題に対する研究系としても重要である。

裏磐梯地域は磐梯山の噴火によって形成された高原状の地域で、山体崩壊によって川が堰き止められて形成された桧原湖、秋元湖、小野川湖などの湖沼群を有する点が特徴的である。磐梯朝日国立公園に含まれ、噴火時期が明確な火山活動によって形成された地形と、壊滅的な影響を受けた後の生態系の回復過程を示している貴重な地域となっている。一方で、裏磐梯地域には居住地もあり、観光地としても重要な地域で、道路等の整備も進んでいる。このような人為的な影響は、しばしば外来植物の侵入と定着をゆるす素地を作る事になる。自然環境に恵まれた裏磐梯地域も例外ではなく、数多くの外来植物が存在している。本研究では、山形県内の外来植物の調査の一環として、隣接地域の一つとして裏磐梯地域で外来植物の調査を行なったので、報告する。

2. 調査

調査は 2014 年 10 月 20 日に行なった。調査ルートは、白布峠から県道 2 号線を南下し、早稲沢地区から桧原湖沿いにさらに南下し、国道 459 号線から県道 70 号線（磐梯吾妻レークライン）に入り（中津川溪谷以西が北塩原村、それより東側は猪苗代町）、秋元湖東岸から若宮地区に入り、国道 115 号線に交わるまでとし、調査担当者 5 名で道路沿いに視認できる外来植物を記録した。車中

からの調査が中心なので、イネ科やカヤツリグサ科の外来植物は、今回は観察対象から除外した。

3. 結果と考察

記録できた外来植物は、アラゲハンゴンソウ *Rudbeckia hirta* L.、オオキンケイギク *Coreopsis lanceolata* L.、フランスギク *Leucanthemum vulgare* Lam.、ブタナ *Hypochaeris radicata* L.、キクイモ *Helianthus tuberosus* L. (以上キク科)、モウズイカ *Verbascum blattaria* L. (シロバナモウズイカ f. *albiflorum* (G.Don) House : ゴマノハグサ科)、セイヨウハッカ *Mentha × piperita* L. (シソ科)、ムラサキツメクサ *Trifolium pratense* L.、セイヨウミヤコグサ、*Lotus corniculatus* L. var. *corniculatus*、トウコマツナギ (キダチコマツナギ) *Indigofera bungeana* Walp. (以上マメ科)、サボンソウ *Saponaria officinalis* L.、ムシトリナデシコ *Silene armeria* L. (以上ナデシコ科) であった (図1, 2)。ブタナ、ムラサキツメクサは調査区間の各所に生育が確認された。イネ科植物を対象から外しているためであるかもしれないが、自然公園内で森林の比率が高く、人為的改変を受けている面積が相対的に小さい事もあって、確認された植物種数は比較的少なかった。

アラゲハンゴンソウは早稲沢地区と小野川湖—曽原湖間のペンション群内の道路脇で確認された。過去の栽培品の逸出によるものと思われる。オオキンケイギクは小野川湖南西端の居住地周辺に多数生育し、秋元湖東岸の若宮地区の居住地周辺でも見いだされた。これらもおそらく過去の栽培品の逸出と思われる。本種は特定外来生物 (特定外来生物等一覧 (環境省 HP: <http://www.env.go.jp/nature/intro/outline/list/>)) であり、日本の侵略的外来種ワースト 100 の中にも含まれている。道路に沿ってより自然度の高い環境に侵入しないように監視が必要であろう。フランスギクはアラゲハンゴンソウおよびオオキンケイギクに伴って発見された。今回の調査範囲から外れているが、県境の白布峠でも実見しており、本種も自然度の高い環境に侵入する可能性がある。キクイモとセイヨウハッカは、若宮地区の小集落に群落を作っているのが確認された。後者は栽培品の逸出であろうと推測された。モウズイカ (シロバナモウズイカ) は特に北海道および東北地方に見られる外来植物である (長田 1972)。近年は同属のビロードモウズイカ (*V. thapsus* L.) の方が目立ち、本種はあまり数の多くない外来植物となっている。今回も小野川湖南西端の居

住地周辺に僅かに生育していることが確認されたのみである。



図1．裏磐梯地域で確認された外来植物．上段：アラゲハンゴンソウ，中段：オオキンケイギク，下段：モウズイカ（シロバナモウズイカ：左），フランスギク（右）．

マメ科の外来植物の中で特筆すべきは、トウコマツナギ（キダチコマツナギ）

である。本種は一時期在来のコマツナギと同種とされ（現在でも同種説がある）、緑化資材として全国で広く利用されてきた。一方でコマツナギよりも明らかに大型の植物体となること、アロザイム解析によって在来のコマツナギと明らかに遺伝的に異なることなどから、別種である可能性が高いこと、在来種の使用は推奨される地域では利用を慎重に行なうべきである事が提案されている（阿部他 2004）。本種は小野川湖南岸の展望所の近傍に僅かに生育しており、緑化資材に混入して侵入した可能性が高い。増殖力も強いので、早急な対策が求められる。その他、セイヨウミヤコグサは個体数は少ないが、秋元湖に東側から流入する河川の河原で見いだされた。ここにはムシトリナデシコも生育していた一方で、カワラハハコ *Anaphalis margaritacea* (L.) Benth. et Hook.f. subsp. *yedoensis* (Franch. et Sav.) Kitam. やカワラニガナ *Ixeris tamagawaensis* (Makino) Kitam. など河原特有の植物も多く自生しており、外来植物がこれらの植物にどのような影響を与えるのか、注視する必要がある。その他の外来植物として、僅かだがサボンソウが確認された。長野・山梨などに多く見られるとされるが（長田 1972）、山形にも野生化している所があり、東北地方でも点々と見られるようである。



図2. 裏磐梯地域で確認されたトウコマツナギ（キダチコマツナギ：上）とサボンソウ（下）。

4. 謝辞

本研究は平成 26 年度外来生物分布調査（山形県：受託研究）の一環として実施したものである。記して感謝したい。

5. 引用文献

阿部智明・中野裕司・倉本 宣（2004）中国産コマツナギを自生のコマツナギとして扱ってよいか，日本緑化工学会誌 30: 344-347.

日本生態学会（編）（2002）外来種ハンドブック．地人書館．

長田武正（1972）日本帰化植物図鑑．北隆館．

植村修二・勝山輝男・清水矩宏・水田光雄・森田弘彦・廣田伸七・池原直樹（2010）日本帰化植物写真図鑑（第 2 巻）．日本農村教育協会．